

巻頭の言葉

2017年(平成29年)3月末に、国立公園研究所設立に尽力した親泊素子教授(初代国立公園研究所長)が定年退職され、退職後は江戸川大学名誉教授、国立公園研究所客員教授となり、引き続き研究所で活動されることになった。4月1日からは、親泊教授の後任である中島慶二教授が2代国立公園研究所長に就任した。

国立公園研究所は、平成30年3月で設立以来5年が経ち、設立のきっかけになった財団法人国立公園協会からの寄贈図書・資料に加え、多くの方々から貴重な図書の寄贈があり、これを大学の学術情報課の国立公園研究所スタッフである高橋恵美さんが整理を進め、最近の研究所の書棚は随分と形が整った。

国立公園研究所は、平成29年度も学内教職員、客員教員、客員研究員が協力して一年間着実な活動を行った。この年次報告第3号は、一年間の活動成果を編集したものである。編集に当たり柱にした内容が3つある。

一つ目は、平成26年度から開催している「今だから語るその時代の国立公園」をテーマにした、環境省自然環境局長OBを講師に招いて行った国立公園フォーラムの掲載である。このフォーラムは、江戸川大学のキャンパスで開催しており、今回は3回目、平成30年2月中旬から下旬に3回開催した。講師は渡辺綱男氏、星野一昭氏、塚本瑞天氏の3氏、熱意のあるレクチャーと質疑応答を編集・収録した。

二つ目は、昨年11月の大学祭で開催した「国立公園と世界自然遺産の現在」をテーマにしたミニシンポジウムの収録である。ミニシンポジウムは、中島慶二所長が司会を務め、講演者は環境省レンジャーの千葉康人氏、江戸川大学卒業生の石井綾氏と加藤和紀氏の3氏。大学祭に来校していた、国立公園関係のカリキュラムがある現代社会学科のご父母の方々に参加され、国立公園研究所の活動を知っていただく機会になった。このミニシンポジウムは、江戸川大学学生新聞(2018年3月9日号)の一面全頁を使って掲載され、国立公園研究所をアピールする活動だった。

三つ目は、研究所の学内教員、客員教員、客員研究員が取り組んだ研究活動成果の論文、論説、研究報告などの掲載である。内容は、①大正後期から昭和初期に行われた国立公園候補地選定の論考、②海外の国立公園標識のセンスとユーモア、③国立公園の案内標識に準拠した情報提供の仕組みづくり、④日光国立公園日光地区における自然ガイド事情、⑤平成江戸川版現代語訳「国立公園法解説」(上)、⑥「木原文庫」の展示に向けて、の6編である。この中の『「木原文庫」の展示に向けて』は、研究所が寄贈を受けた図書・資料整理の一環になるが、江戸川大学名誉教授だった木原啓吉先生のご遺族からご寄贈いただいた蔵書、資料を吉永明弘准教授が整理に取り組んでおり、その経過をまとめたものである。

年次報告第3号が江戸川大学国立公園研究所の発展と、学内外の皆様に国立公園研究所に関心をお寄せいただく資料になれば幸いである。

平成30年9月

江戸川大学国立公園研究所客員教授・年報編集委員長

油井 正昭